家族システムの歪みによって引き起こされる問題性について

原　英樹

1．はじめに

著しい経済成長により，工業化や都市化が進行する中で，家族の形態が大きく変容し，このような動きにつれて，離婚率の増加や子供たちの情緒や適応上の問題の多発などが顕著となり，家族関係に焦点を当てた家族臨床心理学が注目集めるようになった（平木・中釜，2006）。

家族システム論などに代表される家族臨床心理学は，個人が過去に受けた心的外傷に着目するだけでなく，家族成員間の相互作用やコミュニケーションの過程を重んじて臨床的な問題を捉えようとするものである（亀口，1992）。このような心理学の円環的認識論では，夫婦間の関係性の問題により子供の非行が発生するという一方向的な因果関係を把握するだけでなく，子供の非行対応することに忙殺されることで，その夫婦の疎遠な関係が表面化せずに維持されているという異なる視点からの因果関係にも目を向けることになる。言い換えると，これは，家族を一つの有機的なシステムとみなし，各々の成員が相互に影響を及ぼす複雑な因果関係や力学関係に視点を据えて，様々な問題発生のメカニズムや治療法などを探ろうとするものである（亀口，1992）

さて，家族システムに歪みが見られる不健全な家族には，適切でない世代境界，特定の家族成員に偏った役割や責任，問題性の否認などの不合理な家族間のルールなどが示されており，それが原因となり，正常なコミュニケーションや対人関係作りなどが妨げられて，多くの心理臨床的問題が発生することが明らかになっている（Friel & Friel，1998）。

そこで，本論文では，上記の家族システムにおける構造的な歪みとそれによって引き起こされる様々な障害や心理臨床的問題を概観し，その家族の在り方やその中で展開される関係性を把握することの意味を再検討していきたい。

2．家族内の不健全な役割

Friel & Friel（1998）によれば，不健全な家族では，各成員が担う役割に柔軟性がなく，特定の人物に偏った役割や責任が課せられており，以下のような適切さを欠いた様々な役割が存在していることが述べられている。

(1) ドゥアー（The Do-er）

この役割を果たす人物は，家族の主な仕事や機能を一手に引き受ける傾向が強く，時に疲労や空虚感を持つことがあっても，他者の役に立つという満足感や責任感から労苦を厭わず，食事や炊事から，家族成員の細々とした世話までし続けることになる。

(2) イネイブラー（The Enabler）

あらゆる自らの犠牲や努力を以って，家族全員をまとめあげるとする役割である。家族内の争いを諌めたり，発生している問題が表面化しないように常に配慮しながら行動していくこと

になる。

(3) ロストチャイルド (The Lost Child)

一人で遊ぶ，部屋に閉じこもるなどの孤独な行動を特徴とし，家族から自らの存在を消すからのように逃避する形で機能不全状態の家族に対応しようとする。

(4) 英雄 (The Hero)

不断の努力により社会や学校などで成功，活躍を示し，不幸な状態にある家族に名誉や誇りを与える重い責任を引き受ける存在である。

(5) マスコット (The Mascot)

自分自身の辛さや孤独などの感情表現を抑えて，常におどけた言動で家族を陽気にさせようとする道化師的役割である。

(6) いけにえの羊 (The Scapegoat)

非行や犯罪，アルコール依存など社会的に問題のある行動を起こして，家族の厄介者を体現することになる。他の家族成員から「あいつがいなければ，この家は平和なのに・・・」などと非難の的になり，家族内の問題や矛盾を引き受けることになる。

(7) プリンセス (Dad's little Princess)

父親や母親のパートナー的な役割を演じる役割である。子供らしい感情や意志の表現を抑圧し，親に合わせた行動をとり続けることで，成長してからも他者から虐待の被害を受ける傾向が強い。悪化した事例では，子供たちが精神的な近親相姦的な役割を強いられ，深刻なストレス障害を被ることもある。

(8) 聖者 (The Saint)

家族内の暗黙の期待にこたえて，聖職者ような，常に正しく清新で精神的に価値の高い崇高な行動を体現する役割である。

Kritisberg (1985) の論じるところによると，不健全な家族では，各々の成員が前記のような役割の，一つの役割，あるいには，複数の役割を担っていて，家族内の力動性の変化が生じると，異なる役割へと役割を変えていくことも少なくないとされている。また，これらの役割の機能的意味を考察すると，ある種の問題を抱える家族が，真の問題性を覆い隠しながら，現状の家族間の力動的安定性を維持することに資することが明らかになっている (Kritisberg, 1985)。

3．不適切な家族内のルール

Kritisberg (1985) や緒方 (1996) により，アルコール依存症を始めとした家族システムに歪みがある機能不全家族には，混乱した家族内に一定の秩序付けを為すべく，以下のような適切性を欠いたルールが用いられていることが論じられている。

(1) 硬直のルール

アルコール依存者などの問題行動を示す者を抱える家庭では，その者が家族内で暴れたり，暴言を吐いたりするような不測の事態に対応して家庭を維持しようと，常に身構えて硬直性の高い言動で発生する事態に対応しようとする傾向が強い。このような対応姿勢は柔軟性を欠くものであるため，事態の本質的な転換や変化には対応できないことが多い。

(2) 沈黙のルール

アルコール依存者の家族は，家の中で起きている受け入れがたい事態を部外者に対してはもちろん，家族内でもそれを話題にしてはならないというルールに縛られており，家族が問題に対して積極的に取り組むきっかけが得られないとされている。

(3) 否認のルール

家庭内に依存症などの問題を示す者がいる機能不全家族では，家族成員が家族内に問題が存在することや事態が悪化していく現実を一切認めないとする原則に基づいて行動し，自分たちの家族には問題がないと装うことで，根本的な変化の必要性を否定しようとするのである。

(4) 孤立のルール

飲酒などの家族内の問題が，家族以外の周囲の者に知られないように，問題を抱える家族の者が他者との親密な交流を拒もうとする行動傾向で，他者との交流が妨げられることで，適切な関係性を築いていく上で大きな障害が生じる。

上記のルールは，依存症などの問題を抱える家族が，混乱した事態を緩和して家族内に安定性をもたらそうとするものであるが，その試みも家族システムの歪みを根本的に修正することには至らないため，事態を建設的な方向へと導くことにはつながらないことが論じられている(Kritisberg, 1985)。

4．不適切な世代境界

Friel & Friel (1998) は，不健全な家族では，両親と子供たちとの世代間の境界に以下のような問題性が見られることを指摘している。

(1) 強過ぎる世代境界

両親と子供との世代間の境界が，強過ぎる家庭では，親と子供の間の精神的，物理的な交流が妨げられる傾向が強いことが明らかにされている。両親と子供との間に遊びや話し合いなどの深い関わりがなく，親の厳然とした姿勢のみが示される場合，子供は両親の暖かい養育性を感じ取れず，孤独感にさいなまれることが論じられている。

(2) 弱過ぎる世代境界

両親と子供との世代境界が弱すぎて，子供が，大人の役割や責任を果たすことを求められると，子供らしい感情や欲求を持つことが妨げられて，大きな心身的ストレスを受けることが示されている。時には，肉体的な近親相姦，精神的な近親相姦などに至る深刻なケースも報告されている。

Friel & Friel (1998) によると，不健全な家族では，強過ぎる世代境界，あるいは，弱すぎる世代境界が見られるか，または，両者の間を行き来するなど，柔軟に状況に応じて適度な距離感を保った形で対人関係を持つことがなされていないと指摘されている。つまり，このような家庭は，家族成員が適度な関わりを維持しながら，家族全体として一体感を保つことが出来ず，その家庭で生活する子供たちが適応的な集団生活を営むための養育的環境に欠けていることを意味しているのである。

5．家族内に見られる三角関係の問題性

遊佐 (1984) は，家族臨床心理学の理論家であるボーエン (Bowen) やミニューチン (Minuchin) などによる家族システム論を基に，以下のように，不健全な家族内に起こる三角関係的な問題を明らかにしている。

ボーエンによれば，二者間の融合性に関して，近親性への欲求と適度な対人的距離感の維持という背反する感情を適切にコントロールしながら，安定した関係を維持していくことが難しい状態にある場合，第三者を巻き込んだ，三角関係 (triangle) と呼ばれる新たな対人関係的システムを構成しようする傾向が強くなるとされている。

とりわけ，緊張した二者関係に対して，不満をより強く感じる者が，新たに引き入れた第三者との間に融合関係を結ぶ傾向が強く，取り残された一人が遊離的な状態に移行するとされている。このような三角化のシステムにより，一

時的には二者関係で発生した緊張関係が緩和されるものの，遊離的な状態になる者が疎外感を感じるなど，別の対人関係的問題が生じて，安定した関係性が本質的に構築されるには程遠い状態であると論じられている。

また，ミニューチンの家族間の提携と機能に関する見解によると，家族内の三者の関係性では，強い提携関係を結ぶ二者と遊離状態にある者が組み合わせされて，いくつかのパターンが形成されていることが明らかにされている。

(1) 片親と子供の強固な融合性

片親が，たとえば父親などが不在であるなど，何らかの理由で家庭内の役割や存在感などを示せない状況ある場合，そのパートナーである母親は，夫から得られない親近感や協力などを子供に求めるようになり，不満を感じた一方の親と子供との間に強い融合関係が築かれる。しかし，残されたもう一方の親が孤立した状態になり，本質的に安定した関係を形成することには至らないとされている。

(2) 迂回連合

両親間に解決されない強い葛藤関係が存在する場合に，両者が子供の非行などの問題性を共に批判することで，あたかも連合関係を持つかのような姿勢を示すことを意味している。この関係を，両親の側から見ると，子供を非難するという間接的な方法で連合性を示していると解釈され，他方，子供の側から見ると，子供が非行を行うことで，両親の不和を顕在化させないような機能を果たしていると理解されるのである。

6．亀口による歪んだ家族システムの類型

亀口（1992）は，上記のような歪んだ家族システムについて，我が国の社会や家庭の実情を踏まえて研究を進め，以下のようなより詳細な類型を明らかにしている。

(1) 父親孤立型システム

日本の平均的な家庭では，父親は職場で機能することが最優先され，家庭内の役割や存在感が軽視される傾向が強く，父親本人が自覚するしないに関わらず，心理的，情緒的に孤立した状態になり，結果的に，母子が密着した関係性を築くという問題が発生することが多い。

(2) 迂回攻撃型システム

葛藤やトラブルを抱えた夫婦が問題に直面せず，非行などの問題行動を示す子供を攻撃するパターンである。子供を共に攻撃することである種の疑似的連帯感を持つことにつながり，一時的には，彼らの間の疎遠な関係を覆い隠すことになるが，根本的な改善にはならず，問題が繰り返される。

(3) 迂回保護型システム

前述のように夫婦間の葛藤が見られる場合でも，子供が病気や障害を持っているような事例では，子供を保護養育するために，彼ら自身の関係性の問題を棚上げにして，協調しあうことが多い。このようなケースでは，当座の連帯感がもたらせられるが，本質的問題が隠蔽されていることに変わりはなく，当事者がその問題に気が付く機会が中々得られずに，真の関係性の改善が進まないことが多いと指摘されている。

(4) 分裂型システム

夫婦間が疎遠で，子供が複数いる家庭において，それぞれの親が，別々の子供を味方につけて対立関係を生じるパターンである。両親たちが問題を顕在化させない場合には，家族の分裂が回避されるが，それが表面化するような事態に至ると，離婚や別居などを引き起こすことも多い。

(5) 世代断絶型システム

両親の世代と子供たちの世代との間に，人生や行動に関する価値観や規範意識などの著しい

隔たりが見られ，それが固定化すると，親子間の親密な交流が妨げる要因となることが知られている。

(6) 離散型システム

上記の世代間の断絶に加えて，夫婦間，子供たちの同世代のサブシステムにも亀裂が見られるケースで，一人一人が単なる同居人のような形で暮らし，家族内の一体感，所属感が薄れて，まとまりのない状態になる。都市化した近代的な生活スタイルの中で，過度な個人の権利や多様性が強調され過ぎた家庭で多発しやすいシステムの歪みであると論じられている。

(7) 密着型システム

離散型と対極にある家族システムで，家族の成員全員が心理的に過度に密着し過ぎるため，成員の一人に問題が起こると家族全体に動揺や葛藤が伝播する傾向が強い。世代間の境界，同世代サブシステム間の境界共に曖昧で，個人としての分化度が未熟であるため，その中で暮らす成員は，自他の区別が出来ずに適切な対人関係を形成することが困難になると指摘されている。

(8) 均衡型システム

この家族システムは歪みがなく，理想的な状態を表している。各々の家族成員間に適度な距離感があり，世代間の境界や同世代サブシステム間の境界の双方が維持されている。相対的に，家族内の力動性がバランスよく配置されている健全な家族形態であると言えるのである。

前述のように，問題のない均衡型を除いた，家族システムの歪みが示された様々な類型では，何らかの形で家族間の適切な交流やコミュニケーションが妨げられるなど，様々な心理臨床的問題の発生につながる要因が形成されていることが明らかにされている（亀口，1992）。

7．家族システムの歪みと共依存関係

依存症は，社会生活や対人関係などに繰り返し重大な障害をもたらす悪癖であり（信田，2000），物質に対する依存としてのアルコール依存症や薬物依存症，プロセス（行為過程）に対する依存症としてのギャンブル依存症，買い物依存症，窃盗癖，また，人間関係の依存症としての共依存症，恋愛依存などがあるとされている（斎藤，2009）。

代表的な依存症であるアルコール依存症とその家族に関する知見を鑑みると，依存症は，世代を超えて伝播することが捉えられていて，そのような依存症者を生み出す家族システムには，特徴的な問題が見られるとされている（斎藤，2009）。

さて，対人関係の依存症である共依存は，アルコール依存患者の夫とそれを支える妻との依存的な対人関係を表す概念として生まれ，当初はアルコール依存症などの嗜好者が生み出される家族関係などを対象としたものであったが，近年では，アルコール依存，嗜好などの枠を超えて，前述のように機能不全状態にある様々な家族間に見られる依存関係などにも適用範囲が広げられつつある（緒方，1996；信田，2000）。

このような近年の状況を踏まえて共依存の定義を見ていくと，その問題は，自己中心的で思慮に欠ける行動や，社会や対人関係に支障をきたすような問題行動で他者を振り回す者と，そのような社会生活に破綻をきたすような問題行動を続ける者に対して，一方的な世話や援助を行うことに没頭し続けることで相手を無意識的に支配しようとする者との二者間の依存関係であり，互いに嫌悪感，憎悪や憎しみなどを抱きつつも相互に離れられない深刻な関係性の病理を表すものであるとされている（斎藤，1997）。

さて，斎藤（1997）は，アルコール依存者の夫とその妻の間に存在する共依存的関係を典型例として取り上げ，その依存者である夫は誰の目にも明らかな形で社会生活に支障のある行動

を示すことになるために，その本人の問題は，色々な面で幅広い注目を集めるが，一方，生活破たんを引き起こす夫を支え続けている妻に関しては，その問題性が顕在化しないため，近親者はもちろん，親しい周囲の者にも周知され難くく，反対に，甲斐甲斐しく夫を支える愛情深い人物として称賛されることも少なくないことを論じている。注目すべきは，一見すると，慈悲深く捉えられる妻の行動も，別の視点から見ると，自分がいないと生活が困難となる夫を支えることで，自らの存在意義を確認し，他者をコントロールする欲求を満たそうとすることであることも多く，結果的には，支えすぎる妻の過度の保護的な行動が，夫の問題行動を維持することに貢献するいわゆる〝イネ―ブラ―〟と呼ばれる問題行動を体現することに他ならないと解せることなのである（斎藤，1997）。

上記のように，共依存状態が展開されている家族システムの中で育つ子供たちは，両親間に示される対人関係のやりとりを見聞きすることで，上記のような問題性の高い対人関係やコミュニケーションの持ち方などを身につけることが知られており，その結果，夜尿症，不登校，家庭内暴力，非行，食行動異常などの症状を呈すことが知られている（斎藤，1986）。中でも，アルコール依存症などの機能不全家庭で生育した女子は，自分の父親と同様のアルコール依存症者などを人生のパートナーに選択し，一方的な世話をし続けるような夫婦関係を形成する割合が高いことが示されており，依存症などの問題を抱えた歪んだ家族システムは世代を超えて伝播していく傾向が強いことが指摘されている（緒方，1986；斎藤，1984）。

前述の知見や論議をまとめると，共依存関係で生育する子どもたちは，親の世代から歪んだ対人関係やコミュニケーションを学び取り，自らの世代でその共依存関係を再生産する傾向が強く，共依存は世代間を超えて継承される簡単には根絶できない，歪んだ家族システムにより媒介された根深い対人関係の病理であると言えるのである。

8．円環的因果律による問題考察の重要性

亀口（1992）によって述べられているように，家族臨床心理学の円環的因果律による問題行動の考察は，両親の不和に起因した子供の養育時における協力性の欠如により，非行が発生したというような親から子供への一方向的な影響を考察するだけでなく，他方，子供の非行により，両親がその対応に追われる結果，親たちの疎遠な関係という問題性が緩和され，覆い隠されるという子供の行動が両親に与える異なった方向性からの影響をも検討するのである。つまり，円環的因果律による問題考察では，家族を有機的につながっている一つのシステムとみなし，家族成員間の相互力学や関わり方の複雑に連鎖した作用過程を詳細に分析して，心理臨床的問題性の発生や対応を考えていくのである。

とりわけ，問題行動を為す者のパーソナリティーや，その人物が過去に被った心的外傷などの個人的観点に焦点付けを行っても，その発生の原因やメカニズムが明確化できないような事態に対しては，その問題行動の本質的理解を促進するため，当該人物の家族システムについて，円環的因果律的観点から，その問題性の考察を行うことが重要となることも多いと考えられる。

斎藤(1996)によれば，非行や不登校など一見すると個人的な原因によるものと思われる心理臨床的な問題も詳細に考察してみると，その問題が家族システムの歪みに起因していて，偏った形で背負わされている責任や役割の重さに耐えきれなくなった特定の個人が，アイデンティファイド・ペイシャント（IP）として，何らかの形で問題行動を起こし，その家族全体の構造的問題に警鐘を鳴らしているものであると解釈される事例が見られると指摘されている。

そこで，いくつかの問題行動の事例を円環的因果律的立場から考察すると，以下のように家族システム上の問題点が炙り出され，また，そ

のような問題行動がシステムの歪みに起因したものであると判明することも珍しくないことが分かるのである。

ある児童期の女子学生を例にとると，その子は常に明るく，快活で，新聞配達から一家の家事炊事をも一手に担い，親代わりに弟たちの世話までしっかりこなし，学校では，クラスでは学級委員を務め，運動部の活動にも懸命に参加する典型的な〝よい子〟であったが，学校の休暇中に突然家出をして周囲を驚かせた。それに対して，親や教師など周囲の誰もが「なぜ，あんなに真面目でしっかりした子が家出をしたのか理由がさっぱり分からない。」という趣旨のことを異口同音に述べるような状態にあった。個人的な視点からはこの事例の家出の原因は理解し難いものであったが，彼女の家族システムに視点を据えて問題を考察してみると，その子は，親の期待に応え，遊びたい盛りにもかかわらず子供らしい欲求や思いを抑えて，児童期の年齢に不相応な役割や責任を果たし続けてきており，その過重な負担から逃げ出す唯一の方法として家出を選択しなければならなかったことが明らかになるのである。

また，ある共働きの家庭で鍵っ子として暮らす男子児童のケースについて考えると，その子は，著しい非行などの行動傾向は一切伺えず，経済的にも何不自由ない状態にありながら，時折万引きを繰り返し，その原因が理解出来ない親や教師などを困惑させていた。顕著な非行傾向や経済的な困窮状態もない子供が犯したその万引きも，鍵っ子としていつも孤独に放置されていたその子が，万引きすることで，心配する親などの家族全員を呼び寄せようとする試みであると解釈すると，その問題行動の原因が歪んだ家族システムによるものであり，問題を起こす子供は，IPとして家族全体の問題に警鐘を鳴らす役割を果たしていたと推察することが可能になるのである。

上記で論じた事例などを再検討すると，既に述べたように，個人的な視点に基づきパーソナリティーや心理的外傷など対する考察を進めても，問題の発生原因や介入的アプローチを充分に見出すことが難しいような場合，その本質的理解を促進するために，家族を一つのシステムとみなして，その成員間の複雑な交流や力学的作用を重んじて，心理臨床的問題を捉えていくことが望ましいと言えるではないだろうか。

9．おわりに

人間は，固有の気質や一人一人の独自の体験を礎に成長していくものであり，個人を起点としてその心理的な問題を捉えることが重要なのは言うまでもない。同時に，個人は，家族という相互に影響を与えあう対人関係のネットワークから切り離せない存在として生育する存在であるため，様々な問題の発生原因やメカニズムを的確に把握するためには，共に生活してきた家族内の役割，ルール，世代境界，家族の構造形態などを丁寧に理解することが必要となる。従って，適切な教育や心理的治療を行うためには，個人的な視点に加えて，家族システムという観点をしっかりと踏まえて，心理臨床的問題性を検討し，その原因や対応を検討していくことが不可欠であると言えよう。

文献

Friel, J. W., & Friel, L. D. 1998 The secret of dysfunctional families. Florida: Health Communications, Inc.（杉村省吾・杉村栄子訳　アダルトチルドレンシンの心理―うまくいかない家庭の秘密．ミネルヴァ書房版.）

平木典子・中釜洋子2006 家族の心理―家族への理解を深めるために―．サイエンス社.

亀口憲治 1992 家族システムの心理学 ― ＜境界膜＞の視点から家族を理解する．北大路書房.

亀口憲治 2000 家族臨床心理学 ― 子どもの問題を家族で解決する ―．東京大学出版会.

Kritsberg, W. 1985 The adult children of alcoholics syndrome-A step-by-step guide to discovery and recovery. Florida: Health Communications, Inc. (斉藤学監訳・根伊登恵訳　アダルトチルドレンシンドローム — 自己発見と回復のためのステップ．金剛出版.)

西尾和美 2005 機能不全家族．講談社.

緒方明 1996 アダルトチルドレンと共依存．誠心書房.

斎藤学 1984　嗜好行動と家族 — 過食症・アルコール依存からの回復．有斐閣選書.

斎藤学 1986　アルコール依存に関する12章嗜好行動と家族．有斐閣新書.

斎藤学 1997 家族の中の心の病 —「よい子」たちの過食と拒食．講談社.

斎藤学 2009 依存症と家族．学陽書房.

遊佐安一郎1983 家族療法入門 — システムズ・アプローチの理論と実際．星和書店.